

2006年1月14日

「よこみち孝弘さんの衆議院副議長就任と新年を祝う会」挨拶文

衆議院副議長 横路 孝弘

皆さん、明けましておめでとうございます。

昨年9月の突然の総選挙では、ハリケーン、暴風雨のような嵐が荒れ狂う中、皆さんのご支援で当選することができました。心から御礼を申し上げたいと思います。本当に皆さんありがとうございました。

そのあとの国会で、衆議院の副議長に就任いたしました。就任することによって、国会の中の会派は離脱することになります。ですから今は民主党会派ではなくて無所属会派に所属しています。ただ党籍は、河野議長は自民党ですし、私は民主党という党籍はそのままです。

河野議長から就任の時に言われたのは、「国会の中の会派の様々な動きについての発言は副議長として慎重にしなければいけない。しかし政治家として政治について語ることは、行動することは大いにやっていますよ」ということを言われまして、非常に意を強くして副議長に就任し、その後もあちこちで憲法の講演などをして歩いているところでございます。

今度の国会運営はなかなか大変でございますけれども、先ほどの河野議長のお話にもありましたように、やはり議論するという意味では少数派もしっかりと意見を述べて、審議ができる環境を整えるというのが私の仕事でございますので、議長共々そのために全力を尽くしていきたいというように思っております。

本年たくさんの皆さんから年賀状を頂きました。今年は特に今の日本の社会の世相とか状況について触れておられる方が大変多かったのですが、民主党の現状についても大変厳しいご意見が多くございました。

その中のひとつつたつを紹介しますと、例えば「建物ばかりではなくて、日本列島の全ての倫理観が音を立てて崩れてしまうような世相ですね」というような声とか、あるいは「改革の名の下に日本中がひっくり返っている感じがしてなりません。古いやつだと笑われようと、守らなければいけないものはあると思いつけています。声高なスローガンに弄ばれたくない」というような声もありましたし、「市場の自由ということよりは、精神の自由ということをお自分は大切にしていきたい」というような声なども寄せられておりました。

バブルがはじけてから日本列島はものすごく攻撃的な社会になって、ギスギスしてきているように強く感じます。ストレスも多い社会になりました。ゆとりと優しさがなくなってきている、こんな思いをいたします。

日本人はもっと寛容で、そして情にもろい、そんな民族ではないかと思っておりますが、どうも小泉さんの言い方も喧嘩腰ですし、そんな社会になって、特に最近、子どもが被害者になったり加害者になったりしていますが、もう本当に不気味といえますか、日本人そのものが変になってしまったのではないだろうかと思うような事件もたくさん毎日のように報道されております。

その要素はいろいろあると思うんですけども、やはり「競争！競争！」という社会の中で、その競争から排除された人たちがたくさんおられ、人と人を結び付けていた社会の絆がどうもなくなってしまったんじゃないかと思います。

政府はよく「自己責任」といいますが、国民はみんな一生懸命家族のために、会社のために働いているわけでごさいます、そんな意味では自己責任を多くの方がすでに全うしているというように思うんです。これ以上もっと走れといわれても、走れない人も歩けない人もいるわけでごさいます、人それぞれなわけです。ですからそのことをもっと大切にして、全てが日本の国民でありますから、大事にしていくことが必要であると思っております。

現在の日本の社会秩序が崩壊しつつある状況の中で必要なのは、やはり安全装置をしっかりと作ること、そのことは政治がいま果たさなければいけない大きな点だと思っております。人々を排除しない、人を大事にするということが何よりいま問われているのではないかと思っております。

さて今度の国会は、サラリーマン増税とか医療制度の改革のほかに、憲法改正の国民投票法案が提出されることになっておりまして、いま与野党間の話が進められているというように聞いております。どんな内容なのかよくわかりませんが、しかしいざにして憲法の改正ということは政治の日程に上りつつある状況ではないだろうかと思っております。

私もあちこちで憲法講演をしていますが、人々の関心は非常に強いのです。憲法改正は結局は憲法9条の改正なわけです。そこで少し9条の制定過程について皆さんにご紹介したいと思っております。

よく憲法9条は「占領軍から押し付けられた」と言う方がおられますが、マッカーサーがアメリカに帰って昭和26年にアメリカ上院外交委員会で証言した時に、「憲法9条というのは、日本人の発案である」ということをはっきりと断言しています。原子爆弾を経験した日本人、それを踏まえて憲法9条は生まれたんですよという話をしているんです。

憲法制定の帝国議会が開かれたのは昭和21年。その中でマッカーサーと、当時総理大臣だった幣原喜重郎さんが1月末に会談しています。「マッカーサー・幣原喜重郎会談」というのは有名な会談です。

幣原さんは以前に外務大臣をやっていて、軍縮などをずっと率先して進めてきた人で、1928年パリで戦争放棄を決めた不戦条約、このときの外務大臣なんです。彼のいろんな本などに書かれている、その「マッカーサー・幣原喜重郎会談」をちょっとご紹介したいと思います、幣原は『かねて考えていた世界中が戦力を持たないという理想像を始め、戦争を世界中がしなくなるためには戦争を放棄する以外にはないと考える』と話したところ、マッカーサーは急に立ち上がって両手で手を握り、涙をためて『その通りだ』と言い出した。世界から信用をなくした日本にとって、戦争をしないということをはっきりと世界に表明すること、ただそれだけが敗戦国・日本を信用してもらえ唯一の堂々と言えることではないだろうかということをして、大いに二人は共鳴して、その日は別れた。」というように回顧録で書かれています。

マッカーサーはアメリカに帰ったあとあちこちで講演しまして、日本の憲法9条の大切さを講演して回っているんですね。私も今回初めて知りましたが、そういうことがひとつ背景にごさいます。

そして昭和21年に帝国議会で憲法制定議論がずっと行われたんですけども、その帝国議会の中で憲法9条は小委員会を作って議論をしているんですが、芦田均さんが委員長で、彼が本会議で次のように報告しています。「近代科学が原子爆弾を生んだ結果、将来万一にも大国の間に戦争が開かれた場合には、人類の受ける惨禍は、測り知るべからざるものがあることは、何人も一致するところでありましょう。我らが進んで戦争の否認を提唱するのは、ひとり過去の戦禍に依って戦争の忌むべきことを痛感したという理由ばかりではなく、世界を文明の壊滅から救わんとする理想に発足することは、言うまでもありません。」と。議論を聞くと本当に熱のある議論をしているんですね、9条について。これはただ単に我々は戦争に負けたから戦争放棄するというのではなくて、原子爆弾というものが登場した以上、このまま放置したのでは世界は滅びてしまうと。だから日本はそのことを救うために率先してこの9条を制定するのだという非常に熱い議論と理想に燃えて、憲法9条は修正されて可決されているわけでございます。

そのことを私どもは大事にしななければいけないわけですし、戦後60年間、朝鮮戦争があり、ベトナム戦争があり、湾岸戦争がありました。日本はそれに参加することなく、そして戒厳令というようなことなども無縁で、自由を謳歌してきたわけでありまして、世界では武器輸出をしない国、国際紛争に武力を持っては介入しない国として評価されてきているのです。

この60年間の持っている意味というのは大変大きいものがあると思います。そしてこの理想を制定した時に、帝国議会の中で議員の人たちが議論したように、世界の大きな原則となるように、国のひとつの理想の目標として掲げていく、続けていくことが私は必要ではないかと、そのために全力を尽くしたいと思っております。

さて民主党の現状について、これは副議長としてではなくて一人の党員として申し上げたいと思うのですが、政権交代を可能にするために野党にとって何が大切かといえば、それは言うまでもないことですが、自民党に対抗するビジョンと政策ですね。そのことを明確にして、自民党とは違うビジョンと政策を明記して、もうひとつの選択肢を国民の前にしっかりと提起するということが政権交代のためにはやはり必要なわけです。

しかし残念ながら9月の選挙のあとに誕生した民主党の体制はどうも小泉路線の継承で、言っていることの中身はそんなに変わらないなという気がいたします。

例えば、アメリカとの関係ももちろん大事なんですが、しかしアメリカは世界的な戦略を持って展開している国です。この世界戦略と共通の認識に立って軍事面でも協力していこうというような、今の日米安保体制をむしろ変えて強化するというような方向でありますとか、あるいは市場原理主義を「小泉さんよりももっとスピードを上げてやるんだ」というような、言わば改革競争をやっていこうじゃないかと、もっと効率的にやっていこうじゃないかと、こういうような政策を主張しているわけですが、政権党と同じ政策を掲げて政権交代だといっても説得力を持たないわけですね。だから大連立などという話が小泉さんのほうから出てくるんです。違いがないんだから一緒にやろうじゃないかと、こういう話ですよ。

これで本当にいいのだろうか。去年の9月の選挙でも2480万の人々が期待してくれたんですね、民主党に。その前の選挙よりは300万人も多いんです。その想いはいろいろあると思いますが、ひとつはやはり小泉さんの政治に対する危うさを感じた多くの人々が投票してくれたと思うんです、平和の問題や国民生活の問題。ですからその声にしっかりと応えるということが

必要で、応えていくための対抗軸を明確にするということが大事だと思うんです。

ひとつふたつ発言を聞いていますと、小泉さんはこの前、ブッシュ大統領が来た時に、「アメリカとの関係を強化すればするほど、中国や韓国との関係も良くなるのだ」というなんかさっぱり分からないお話をされて、要するにアメリカ一辺倒ということを主張しました。

日本の外交は戦後、自民党の下にあったわけですが、それまではそんな日米関係一辺倒ではなかったのです。アジア外交、国連外交、そして対米外交という3本の柱をちゃんとバランスをとってやってきたんです。しかし小泉さんはその2本の柱を切り捨ててしまった。それならば、与党ができないことを、政権党ができないことを野党がやるというのが筋ではないでしょうか。しかも世界ではいま非常に大きな相互依存です。中国との間の経済関係も日米関係と同じようなウエイトを持っている、そういう大事な国になっているわけですよ。

ところが小泉さんも言わないようなことを言って、「中国は日本にとって現実的な脅威である。脅威であるから、これに対して我々は中国政府に關与して、その政策を抑止していかなければいけない。抑止するためにはどうするか、周辺事態に対応して、自衛隊が米軍と一緒に軍事行動できるように憲法改正をして、集団的自衛権の行使ができるようにする」と、こういう発言をされたわけですから。これはもう本当に民主党の中で議論されている方向性でも何でもありません。個人の想いですよね。民主党は2480万の人々が支えてくれている公の政党です、個人のものではありません。

こういう発言を聞いていますと、まるで戦前の軍部の青年将校みたいな発言ですね、これは。私は、ではこれで国民の支持を得ることができるのかということ、榊原英資さんは慶應義塾大学の教授をされていますが、彼もずっと今まで民主党を応援してくれましたが、ある新聞で「今の路線を突っ走るならば次の選挙はサポートしない」とはっきりとされています。そういう年賀状もたくさん頂きました。

私も今の路線をそのまま突っ走って行って、政権交代なんていうことはないと思いますし、日本の政治は益々そういう路線になれば悪くなるだけだと思っています。

今の小泉さんの政策は社会にいろんな問題を生み出しています。それを少なくとも野党は取り上げて解決していく努力をしていくということで、国全体の政策のバランスは取れるわけでございまして、それなしにみんな一緒に突っ走っていったら本当にどうなってしまうのかというように思いますから、やはりこの路線も体制も変えていかなければいけない。私は菅さんや小沢さんともその点はみんな一致しているところでございます。

そして来年は統一地方選挙もございまして、参議院選挙もございまして。その時に民主党の看板を背負って、国民の皆さんの前に堂々と政策を訴えビジョンを訴え、統一地方選挙ならびに参議院選挙、そして政権交代へと行く体制をしっかりと作るということがいま非常に大事ではないかと思っております。

党員としてできることは限られていますけれども、具体的に憲法を読んだことのない人が結構多いんですよ。皆さん方も全文お読みになったことはなかなかないでしょう。私が講演しているときの憲法資料をまとめたものを会場内で販売しておりますので、ぜひ帰ってから読んで頂きたいと思っております。

最後に詩をひとつ朗読させてください。ときどき集会で詠んだことがありますから聞いたこと

のある方がおられるかもしれません。「雪崩のとき」という石垣りんさんの詩でございます。

「雪崩のとき」 石垣りん

人は  
その時が来たのだ、という  
雪崩のおこるのは  
雪崩の季節がきたため、と。  
武装を捨てた頃の  
あの永世の誓いや心の平静  
世界の国々の権力や争いをそとにした  
つつましい民族の冬ごもりは  
色々な不自由があっても  
またよいものであった。  
平和  
永遠の平和  
平和一色の銀世界  
そうだ、平和という言葉が  
この狭くなった日本の国土に  
粉雪のように舞い  
どっさり降り積もっていた。  
私は破れた靴下を繕い  
編み物などしながら時々手を休め  
外を眺めたものだ  
そしてほっ、とする  
ここにはもう爆弾の炸裂も火の色もない  
世界に覇を競う国に住むより  
この方が私の生き方に合っている  
と考えたりした。  
それも過ぎてみれば束の間で  
まだととのえた焚木もきれぬまに  
人はざわめき出し  
その時が来た、という  
季節にはさからえないのだ、と。  
雪はとうに降りやんでしまった。  
降り積もった雪の下には  
もうちいさく 野心や、いつわりや  
欲望の芽がかくされていて  
“すべてがそうになってきたのだから

仕方がない いうひとつの言葉が  
遠い嶺のあたりでころげ出すと  
もう他の雪をさそって  
しかたがない、しかたがない  
しかたがない  
と、落ちてくる。  
嗚呼、あの雪崩、  
あの言葉の  
だんだん勢いづき  
次第に拡がってくるのが  
それが近づいてくるのが  
私にはきこえる  
私にはきこえる。

これは1951年1月の詩です。詩人の感性は本当に素晴らしいものだなと思います。  
みんなで仕方がないと言うことはやめて、やはり希望を持って、みんなお互いできるところで  
頑張っていこうではありませんか。

この新しい年、いろんな大変なことが起こると思いますが、それにもめげないで、私もその先  
頭に立って頑張ることをお誓いいたしたいと思います。皆さん一緒にこの年を頑張って参りまし  
ょう。本日は本当にありがとうございました。